

- 問2-2 その授業は理論中心の授業か実技中心の授業か（選択式）
問2-3 その授業は必修科目か選択科目か（選択式）
問2-4 その授業は専門科目か基礎教養科目か（選択式）
問3-1 授業で行うオリエンテーリングはどのような内容か（選択式）
問3-2 授業で行うオリエンテーリングはどのような場所で開催するか（選択式）
問3-3 授業で行うオリエンテーリングはどのような地図を使用するか（選択式）
問3-4 授業で使用する地図はどのように入手したか（選択式）
(問4は授業で行わない場合のみ回答)
問4 なぜ授業でオリエンテーリングを行わないか（選択式）
問5 オリエンテーリングを授業で行う他大学の事例に興味があるか（選択式）

調査対象は、セミナーの座長と演者（次項参照）と面識がある大学教員とし、電子メール添付で調査票を配布した。2019年7月から8月の間に6件の回答が得られた。提出は電子メール添付か郵送か選べるようにしていたが、全て電子メール添付での提出を受けた。特定対象の全数調査や大きい母集団から無作為に対象者を抽出した調査ではなく、回答数としても統計的な意味を持つまでに達していない。それでも、一定の傾向や具体的事例の把握は行え、参考の話題として提示する上では十分な情報が得られた。

回答を得た6大学中、オリエンテーリングやオリエンテーリングに似た活動を「現在実施している」、あるいは「過去に実施していた」のは4大学であった。この4大学（複数科目で実施している大学もある）だけを見ても、「理論中心か実技中心か」、「必修科目か選択科目か」、「専門科目か基礎教養科目か」を問う質問への回答が分かれていた。ある科目の内1時間、あるいは数時間だけ実施している場合などもある。また、その内容も競技スポーツに近いものから観察課題が中心で運動の要素が少ないものまで多岐に渡った。

6大学中、全く実施していない大学は2大学であったが、上記4大学中にも過去に実施していた科目で現在は実施しなくなっているケースも見られた。なぜ実施しないか、実施しなくなったかについては、次のように様々な理由が挙げられた。

- ・適切な地図がない
- ・準備に時間が掛かる
- ・専門知識技能がある教員の不在
- ・既存カリキュラム（種目）でほぼ固定されており、新しい種目が入る余地がない

授業でのオリエンテーリング実施を推奨するためには、上記のような不足や不安を解消する必要がある。関係者一同、セミナーを通じてそうした不足や不安の解消を図りたいと考え、当日の計画を進めた。

キャンパス・オリエンテーリングのコース設定

Setting the Course of Campus Orienteering for Class Activities

松 澤 俊 行

はじめに

筆者は、2017年9月8日から10日にかけて静岡大学静岡キャンパスで開催された第68回日本体育学会最終日のランチョンセミナー（昼食を取りながら聴講できるセミナー）で、オリエンテーリングを応用したプログラムを何通りか紹介した。それらがいずれも短時間の準備で行えるプログラムであることを強調し、授業への活用を呼びかけた。

参加者からは、実際に授業への導入も視野に入れていると見られる反応が少なからずあり、セミナーの目的は達成されたと思われた。一方で、導入を視野に入れることと実際に行うこととの間には、まだまだ高い敷居が存在しているとの認識も新たになり、継続的な呼びかけと、実施を後押しする方策の必要性も感じられた。そこで、上記セミナーの関係者は、オリエンテーリングが授業で行われない理由の把握と、行う意思のある教員を後押しする方法の検討を主な課題として、続くセミナーの計画を立てた。

本稿では、その計画実行の機会となった第69回日本体育学会（2018年8月17日～19日、徳島大学常三島キャンパスで開催）中のランチョンセミナーの様子を報告する。このセミナーでは、前回以上に参加者の導入意欲が感じられる反応が見られた。そうした参加者からの声もまとめておきたい。

なぜ授業でオリエンテーリングが行われないか

セミナーでの発表に先立ち、実態の把握のためにアンケートを実施した。アンケートの質問項目は下記の通りである。なお、下記は概要を示したものであり、実際の調査票の質問文を大幅に短縮している。「選択式」と記した質問の選択肢も省略している。

問0 回答者の所属大学と氏名

問1 大学の授業でオリエンテーリングを行っているか否か（選択式）

（問2、問3の各項目は授業で行う場合のみ回答）

問2-1 授業でオリエンテーリングを行っている場合、その科目名

セミナーの概要

第69回日本体育学会ランチョンセミナーは、公益社団法人日本オリエンテーリング協会が同学会の協賛団体となって企画し、学会初日の2018年8月24日（金）12時から1時まで開催された。群馬大学名誉教授であり、現在は公益社団法人日本オリエンテーリング協会会長を務める山西哲郎が座長を務め、筆者が演者として登壇した。参考までに、同時間帯には並行して3つのセミナーが開催されていた。各セミナー、8時15分から申し込み受付が始まったが、日本オリエンテーリング協会のセミナーは、1時間以内に定員の50名に達したとのことであった。セミナー会場には開始10分ほど前から参加者が集まり始め、最終的には申し込み者全員が出席したことが弁当との引換券の回収により確認された。

セミナー冒頭の挨拶中、座長が前回セミナーの参加者がいるかどうか尋ねたところ、2名が挙手をし、他は初参加であると分かった。その後の演者が担当する時間では、最初に大学授業でのオリエンテーリングの現状を伝えるため、前項の調査結果を示した。

調査結果からも、オリエンテーリングには手軽に行えるイメージがないことが明白で、簡単な準備で行えるオリエンテーリングも存在することは繰り返し強調したいところである。初参加者が多かったこともあり、前回のセミナーでも取り上げたオリエンテーリングプログラムを再び一通り紹介した。それらのプログラムについては筆者が著した「大学の授業で行えるオリエンテーリングの事例」（浜松学院大学短期大学部研究論集第14号, 2018年）にまとめている。

「地図の入手」「コースの準備」「実技の指導」の全てが手軽に行えなければ実施には漕ぎ着けない。逆に、それらが手間なく精神的な抵抗もなく行えるようであれば実施の可能性は上がる、とも考えられる。

オリエンテーリング専用の地図である「Oマップ」は、専門家（プロの作成者もいる）や熱心な愛好家が時間を掛けて作り上げるものであり、使用許可を得たり購入したりする段階で一定の手間が生じる。しかし、キャンパス内で行う簡易プログラムであれば、大学が作成している案内図（参考図参照）を使えば十分な内容が提供できる。

コース設定や実技指導に関しても、特別な資格や経験が必要なものではなく、いくつかのポイントを伝えれば良い。セミナーでは、そのポイントを以下のように示した。

【キャンパスオリエンテーリングコース設定上のポイント】

◇ スコアオリエンテーリングの場合

※ 制限時間内に多くの得点を集める方式。ポイントを回る順番は問わない

- ・ フィールド内の隅から隅まで散らばせる

（複数回実施する場合は、実施回ごとにエリアを区切っても良い）

- ・ 個々のポイントの間隔は均等でなくても良い
(ポイントが疎らな地域、集中している地域があっても良い)
- ・ 難易度 [辿り着きやすさ] にも変化を付ける
(地図を読みさえすれば到達できるようにする。「運」任せにはしない)
- ・ ポイントの遠さや難しさに応じて得点を設定する
(全て得点を変えて表示すると「○点のポイント」と、識別がしやすくなる)
(得点の高いポイント同士が近いと皆そこに集中するので調節する)
- ・ 全て回り切れないぐらいの制限時間を設定すると作戦が分かれる
(ギリギリ回り切れるぐらいでも面白い)

◇ ポイントオリエンテーリングの場合

※ 指定された順番にポイント进行る形式。タイムを競う。

- ・ ポイント間の距離に変化を付ける
- ・ 難易度 [辿り着きやすさ] にも変化を付ける
- ・ 不正 [わざと回る順番を変えて得をする] が起こりにくいようにする
(競技会では電子カードで通過順番を管理しているので、不正が行いにくい)
- ・ 複数のルートがありえるようにする
(右回り、左回り、ジグザグしながらの近道)

<参考>

順番は問わないが全てのポイントを回ることを義務付ける (回る順番は各自考える)
「フリーポイント」という方式もある。

【コース設定以外に考慮、注意すること】

- ・ 通過証明の方法
(確実に通過したことが分かり、不正が行われないようにする。
パンチ [刻印] 器具、シール、スタンプ、写真、観察課題 [クイズ] など)
- ・ 人数の設定
(個人戦か、団体戦か。団体にする場合は人数や力量を考慮する必要あり)
- ・ スタートの方式
(同時スタートか、時間差スタートか)
- ・ 出走前のルールやマナーの徹底
(時間を守る、交通ルールを守る、他の人に迷惑を掛けないなど)
- ・ 最低限の「技術」やコツの伝達
整置…実地の方向と合わせて地図を読むこと。コンパスは使用しなくて良い
ルート選択…右回りか、左回りか、ジグザグしながら近道するかを考えてから進む
(いずれも、専門的な知識や経験がなくても解説できる)

ともできる。例えば、地図内下方の「市営バス 徳島大学南」停留所からマップ左上隅の駐車場（「P」の文字辺り）を目指すコースを組むとする。その場合、「南の道から西の道の大回り」「キャンパス真ん中の道から北の道の大回り」というルートの他、建物の間を抜ける何通りもの近道ルートも考えられる。このように、どう行けば速いかを地図から読み取る課題があると面白い。セミナーでもその点に触れた説明を加えた。

なお、セミナー中のコース設定演習には、参加者全員がすぐに参照できる学会プログラム掲載の案内図を用いた。

セミナーでは、演習の後、さらに授業の内容を充実させるための方策について下記の提案をし、今後を展望した。なお、この提案と展望は、筆者が実際に関わった事例に基づいて記している。

【大学教員と地域オリエンテーリングクラブの連携の事例】

◇ A大学の事例

- ・大学の授業（スポーツ [ウォーキング]）で一部オリエンテーリングを実施
- ・教員が地域クラブにオリエンテーリング用地図（Oマップ）の作成を依頼
- ・地域クラブは授業に地図を提供、クラブ員も練習で使用
- ・地域クラブの練習時、フィールドや更衣所の使用許可に教員が協力
- ・地図はナショナルチームの合宿にも使用
（授業でそのコースに学生がチャレンジすることも可能となった）
- ・地域クラブは定期的に大会や練習会を開催し、地図をメンテナンス
- ・授業への技術協力（タイム集計作業など）も一定期間継続

【今後の可能性】

- ・「現代オリエンテーリング」ではキャンパスでの競技が人気
（フィールドが新鮮でアクセス良好、試合がスピーディ、観戦が楽しめる）
 - ・大学オリエンテーリングクラブも積極的に地図を作成
（練習に活用、大会開催も多数）
- 地図作成費用を大会参加費により回収できるよう、大会開催に教員が協力すれば、大会の地図やコースを授業へ活用できる可能性も生まれる

「今後の可能性」の中にあるように、競技オリエンテーリングの世界でも、キャンパスをフィールドとしたコースへの注目が高まっている。地図も動画も、インターネットですぐ検索し、参照することができる。授業でそうした地図や動画を紹介し、受講者の挑戦意欲を掻き立てる導入方法も効果的である。

愛好者、競技者としてもキャンパスで地図を作成し、競技会や練習ができることはありがたい。そうした思惑と、大学関係者との思惑が一致すれば、双方にとってプラスとなる協力関係が見出せるであろう。この点を最後に強調しながら解説と呼びかけを終え、セミナーを閉会した。

セミナー参加者の反応

説明終了時に13時となっていたため、参加者の多くは閉会后すぐに次の予定へ向かって行ったが、一部は座長や演者への質問や、情報提供のために会場へ残った。以下に、主な質問の内容やその回答をまとめる。なお、番号は便宜的なものであり、質問を受けた順に記しているわけではない。

<質問1>

オリエンテーリングをグループで行う場合の適切な人数は？

<回答1>

一般的に、3人以上だと「他のメンバーに任せて何もしない人」が出てきやすい。状況に合わせて何人でやっていただいても良いが、経験上、2人組をお勧めしたい。

<質問2>

適切なポイント（通過地点）数は？

<回答2>

通過地点が多ければ多いほど、うろついてタイムをロスする可能性が高まる。うまく回るグループとそうでないグループの差も大きくなる。1回の授業なら、さほどポイントを多くせず、5～6ヶ所でも十分だと思う。複数回行う場合は段々増やしていくと良い。

<質問3>

大人数をうまく散らばせるスタート方式の工夫は？ 40名の授業を担当しており、時間差スタートにはしにくい。そこで、3コース用意して、教員とじゃんけんをして「勝ち」か、「あいこ」か、「負け」かによってコースを分けることにしている。

<回答3>

コースを複数用意して、人数を分散するのは良い工夫だと思う。引いたトランプの数字や誕生日でより多くのパターンになるよう分ける方法もある。スコアオリエンテーリングをグループ戦にして、メンバーは一緒に回るのではなく手分けするようにすれば、最初に向かう方向が散らばる。

<質問4>

授業を受けている学生以外の学生も歩き回っているキャンパスの中ではオリエンテーリングがやりにくいのでは？

松澤俊行「大学の授業で行えるオリエンテーリングの事例」 浜松学院大学短期大学部研究論集第14号, 2018年

<参考ウェブサイト>

一般社団法人日本体育学会ウェブサイト <https://taiiku-gakkai.or.jp/>

公益社団法人日本オリエンテーリング協会ウェブサイト

<http://www.orienteering.or.jp/>

国立大学法人徳島大学ウェブサイト <http://www.tokushima-u.ac.jp/>

<回答4>

人数にもよるが、確かにその通りである。通常授業と異なる時期の集中講義などで行う方が良い。あるオリエンテーリング大会では、長期休みの期間の大学キャンパスで行い、通行者の影響をほとんど受けなかった。授業でのオリエンテーリングも、人が少ない時期に行くと、キャンパスが違って見えて新鮮な気持ちになれるかもしれない。

<質問5>

毎回コースの下見はしているのか？

<回答5>

そのキャンパスで最初にオリエンテーリングを行う時はコース全域をしっかりと下見している。初期にしっかりと下見をしておけば、2回目以降は少しの変更で済む。慣れれば地図上だけで距離を計算し、所要時間を読めるようになる。

いずれの質問も、今後の実施への意欲、あるいは実際に行っている授業の情報を座長や演者に提供しようとする思いが伝わるものであった。ここに示した以外にも、オープンキャンパスへの活用可能性を探る質問など、座長や演者の刺激となる意見交換が多くなされた。頼もしく感じると共に、こうした教員たちとの連携の強化の必要性を強く認識した。

おわりに

筆者はこのセミナーの後、日本オリエンテーリング協会へ次のように報告した。

「教育現場でのオリエンテーリング実施を促進する活動は、普及というよりは社会貢献といった意味合いが強い。授業でオリエンテーリングが行われるだけでは、愛好者の増員や強化には必ずしも直結しないが、キャンパストレインでの競技会も増えた現代では、大学の授業でのオリエンテーリング実施を、間接的に強化につなげられる可能性も高まっている。」

キャンパスオリエンテーリングが盛んになったことにより、オリエンテーリングの競技としての発展と、教育活動への浸透が共に進む気運が見られ始めた。この時宜を逃さず、大学教育関係者とオリエンテーリング競技者の双方に利のある活動を続けていきたい。

<参考文献>

松澤俊行「幼児教育科学生のための『野外教育活動』授業に関する研究」浜松学院大学短期大学部研究論集第11号, 2015年

松澤俊行「野外教育活動におけるストリングオリエンテーリングの実践」浜松学院大学短期大学部研究論集第12号, 2016年

松澤俊行「等高線の読み方を学ぶ」浜松学院大学短期大学部研究論集第13号, 2017年